

あおこ

1020304050

なにがどうしたことでしょう。

さっぱり意味が分かりませんでした。

今まで毎月必ずお話を頂いていたのに。

このところ1年近くさっぱり電話もならないのですから。

不安に思って部屋に閉じこもっていた矢先に着信が一件。

そこには、1年前までは見慣れていたはずの名前が表示されていました。

少しの緊張と期待で電話を手に取りました。

「今の状況について一回ちゃんと話し合おう」

1年前にはよく聞いていたあの声が聞こえてきました。

ウレシカッタ。

また戻れるかもしれないと。

大好きな場所に行けるんだと。

そして、その夜事務所にいくことになりました。

同じ年頃の子が楽しんでいるような恋愛も夢のためなら諦められる。

そう心に決めたのはいつのことだったでしょう。

友達との約束だって断っていたら、そのうちいつの間にか呼ばれなくなっていました。

友達がしているブログを見て写真をみては、慌てて画面を閉じることもありました。

その中でぽつんと現れたもの。

コドク。

この扉を開けたらきっとまた大好きな仕事ができるようになる。

そう言い聞かせて、自分の心臓の振動が体全体に響く中

恐る恐るドアノブを回したのです。

こらえておりました。

絶対に見せたくない弱気な顔を見せることになるとは。

「マネージメント部に移動しないか」

信じられませんでした。

この光景が、言葉が、ワタシが、198201280003が。

新しい仕事を受けたのは、腫れた目をしたワタシでした。

まずはアタラシイシゴトに「慣れる」ために2日間の現場に行きました。

朝早くからあの娘を迎えにいきました。

飲みたい飲み物を聞いて買いに行きました。

あの娘はお水が大好きでした。

お菓子も食べたいと行ったので買いにいきました。

あの娘はチョコレートのお菓子が好きでした。

寒いというのであたたかい毛布を用意しました。

撮影が始まると、あの娘を見つめていました。

あの場所にはかつてのワタシがいたのに。

休憩時間に何気なくみた携帯電話には誰からのメールも着信也没有せん。

こういうとき、トモダチに相談するものでしょうか。

ツライ、カナシイ、クヤシイ。

誰からも遊びに誘われなくなったあの頃からひとりです。

ようやく1日目の撮影現場が終わりました。

ハジメテノシゴトということもあって、その日はすぐに眠りにつきました。

2日目がやってきました。

見慣れたあの人も現場にいました。

そうです。

あの娘が呼んだのです。

ワタシだけでは不安だと。

あの人は厳しくワタシに色々と言い聞かせました。

嫉妬しているんじゃないかとも言われました。

ワタシは「ハイ」と答えるだけです。

それは移動中に起こりました。

薄暗い雑居ビルで撮影していたとき。

あの娘に上着を渡して5階から3階に移動しておりました。

あの娘の後ろにはワタシ。

ワタシの後ろにはあの人がおりました。

普段はき慣れないような高くて華奢なヒールの靴をはいたあの娘は

不安げに一步一步おりておりました。

そのときです。

あの娘は階段を踏み外しそうになりました。

ワタシは慌てて引き寄せようと肩をつかもうとしたのです。

ふいに、後ろから大きな衝撃を感じました。

次の瞬間、ワタシは全身がたいそう痛く

周りからは怒鳴り声や悲鳴が耳が引きちぎれそうなくらい聞こえてきました。

水たまりに体が浸っているような感覚もありました。

ミズタマリ・・・・・・・・・・・???

ミズ・・・・・・・・・・・?????

ワタシノチ